

戦間期ポーランドのユダヤ文学研究——異文化接触 と複数言語使用の観点から

たなか もりやす
田中 壮泰

第一次世界大戦の終息とともに共和国としての独立を達成したポーランドにおいて、その独立から1939年のドイツ軍侵攻による独立喪失までのいわゆる戦間期は、ポーランド語文学の中から優れたユダヤ系作家が次々と登場し、そのすぐ隣でイディッシュ語文学が世界的に見てももっとも勢いがあった時期である。戦間期のポーランド文学は、ユダヤ系作家たちの活躍に支えられていたと言っても過言ではない。

「ポーランド文学」といった場合、稀にジョゼフ・コンラッドやイエジィ・コジンスキ（ジャージー・コジンスキー）など、ポーランド生まれの外国語（英語）作家を含める場合もあったが、基本的にはポーランド語で書かれた詩や小説を指してきた。戦間期には、その中に数多くのユダヤ系作家が存在していたわけだが、厄介なのは、ユダヤ系ポーランド語作家の中にはポーランド語以外でも書く作家も多くいたことである。つまり、ポーランド文学といっても、とりわけ戦間期のそれは、言語、民族的な出自、出身地のいずれに軸を置くかで、その内容がかなり異なってくるのである。

本論文は、ユダヤという民族的な出自を軸に置き、戦間期のポーランド文学を捉えなおすことを試みたものである。ここで取り上げる作家たちはユダヤの出自を持ったが、戦間期に独立ポーランドに組み込まれる地域に生まれ、国籍上はポーランド人であり、ポーランド語で書いたという点において、ポーランド文学の作家であると言えた。ただし彼らは必ずしも常にポーランド語だけで書いていたわけではなく、母語がポーランド語ではない者も多く、ポーランド語以外の言語を併用した作家も散見された。

戦間期ポーランドのユダヤ系作家は、その大半がバイリンガルかマルチリンガルであったが、とりわけポーランド語かイディッシュ語、あるいはヘブライ語やドイツ語を使用した。そこで本論文は、翻訳等を介した外国文学の受容にも目を向けながら、「ポーランド語」、「イディッシュ語」、「ドイツ語」の三つの語圏が交わる空間としてポーランドのユダヤ文学を記述し、その実態に迫った。方法としては、ポーランドのユダヤ文学全体を網羅的に記述するのではなく、ユダヤ文学の複数言語使用と異文化接触の観点に着目し、そのような状況を記述する上で最適な作家を選択した上で、個別的な作家研究において深みのある論述を目指した。

本論文は、一言で言えば、「一国家・一言語」の枠組みを超えた文学記述としてある。また、このような視点から戦間期ポーランドにおけるユダヤ文学を論じたものとしては、世界的に見ても最初の試みであり、戦間期ポーランドにおけるユダヤ文学の総合的な研究の第一歩として位置づけることができる。

Study of Jewish Literature in the interwar Poland – from the perspective of the intercultural contact and multilingualism

もりやす たなか

Moriyasu TANAKA

“The interwar years”, the period between rebirth of independent Poland and outbreak of World War II, is one of the most important periods of the Polish literature like “Baroque” or “Romanticism”. Prominent Polish writers like Witold Gombrowicz or Bruno Schulz came out one after another from Poland that gained own national literature. Poland at that time was multiethnic and multilingual society where not only Polish but also Yiddish literature flourished. And furthermore many of Jewish people whose mother tongue was Polish took an active part in Polish literature. It was important problem what position they should be given in the history of the Polish literature.

History of Jewish-Polish literature has been written by some scholars such as Sandauer and Prokop-Janiec. However those all focused on works written in Polish by Jewish writers and omitted the case of their bilingualism, and then not dealt with situations of the intercultural contact through translation of works or emigration of writers.

This paper is the first attempt to describe Jewish Literature in the interwar Poland from the perspective of the intercultural contact and multilingualism by choosing mainly four Jewish-Polish writers, Julian Tuwim, Debora Vogel, Adolf Rudnicki and Schulz. In this paper Tuwim was discussed as not only a Jewish-Polish writer but a singer of “Gypsy” songs for the first time. In the part of the chapters on Vogel and Rudnicki, I shed new light the profile of Jewish literature that adjoined Polish and Yiddish languages. And we can find Jewish-Polish literature that had been developed through the confrontation with German literature by comparing the works of Rudnicki, Schulz and Kafka in the last part of this paper. In these ways I finally present new map of Jewish literature in the Poland which not close in the unity of one ethnic – one national.